
殉教祭の跫音

長崎秋緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殉教祭の跽音

【コード】

N6861G

【作者名】

長崎秋緒

【あらすじ】

田舎の学校に転任して三年目の彼は、自分の立場を中立に置こうと苦心していた。

彼がその学校に赴任してから初めて担任を任された一年一組は、全体的におとなしく見えていたのは束の間で、ひと月も経たないうちに皆それぞれ本来の個性を現し、彼を困らせはじめた。

特に彼を長く深く悩ませる難題を持ち込んできた久美くみという、成績も良く対人関係も巧く、クラス委員に選ばれた時は、彼も生徒達と同様に、久美が適任だと内心喜んでいただけのつもりとした、彼女の育ちの良い、穏やかな人当りがあれば、このクラスをまとめる基盤のようなものを築き上げるのも、それほど難しいことではないように思われ、彼は達観していた。

しかし、そのクラスの中心になつてほしいと願っていた久美本人が、四十人の生徒のなかで、最も彼を悩み苦しめる存在になるとは、その時の彼は一握りも考え及ばなかった。初めての担任ということもあり、はりきりすぎていたことも、彼の、教師としての洞察の目を鈍らせる結果となった。

久美は一見すると控えめな性格で、クラスでも話題の中心となるようなことはなかったが、与えられたクラス委員としてはとても優秀で、誰にでも同じ態度で接し、行事などは率先して係りを割り振りする、生まれ持ったリーダーの資質を存分に発揮し、それでも男女問わず久美を悪くいうようなことは、生徒達のあいだから表立って聞かれることはなかった。

入学当時は赤いフレームの眼鏡をかけていたが、いつの間にかコンタクトに替えていた。

髪型も、黒髪の長く重たそうだったのを、肩にかかる程度にさっぱり切り落とすと、ただいだけ他人の気を惹く魅力的な女の子に変貌を遂げていた。久美に好意をよせる男子は学年を問わず、多数のうわさが教師の間にも伝わってくるほどだった。

学生生活の華といえ、かつて自分がそうだったように、恋愛が

一番先にくるのだから、彼は自分の学生時代を懐かしむ心地で生徒達の一喜一憂するのを見守っていた。

十年も前の高校生時分にも、学校中の注目を浴びる異性はいた。いつの時代も同じことを繰り返し、現在自分はそれを傍で眺め、時には未成年らしい危うさで、先を見通せない無茶をやる。それをなんとか諭し、できる限り真つ当な学生生活を送れるよう指導しているつもりでも、生徒達は簡単に彼の情熱を裏切る真似をしてみせる。それでもまだ、聖職者というものを信じて疑わなかった彼は、それを内に秘め、自分の生徒達への接し方を貫き通せる精神力を持ち続けることができていた。

久美には、尚子なほこという、彼女よりも身長は低く、容姿も劣っていたが、生まれ持った明るい性格から、久美とは違う好感を持たれる友達がいた。二人はいつも行動をともし、外見では劣る尚子が久美の引き立て役のような存在になっていた。

初めのうち彼は、久美がそんな悪知恵を働かせるような子ではないと、彼女のことををかいかぶっていたから、ただなにか気の合うところがあつたので仲良くなつたとしか考えていなかった。

尚子がしょつちゅう久美のそばにいるからか、久美に告白する男子をみたことがなかった。彼の知らないところで、生徒達は学生なのりのやり方で交際を申し込んでいるのだから、そこまで立ち入ってやることもない。あまり過保護すぎても反発を生むことになるだけだった自分の学生時代を思い返し、深入りはしないよう心がけていた。

二学期が始まってはまだ幼さを抱えたままの生徒がほとんどのなか、中学生臭さが抜けてきた生徒も幾人かはみられるようになった。そのなかでも久美は最も早熟な生徒となった。

彼の赴任してきた土地ではもうすぐ殉教祭が行われる。遠い昔に戦乱で命をおとした信者達を慰める、ミサやキャンドル行列があるため、街はその準備にそろそろ活気づいてくる頃だった。

彼も珍しさから二度行列を見物し、夜に大勢の人々がキャンドル

を手に、ライトアップされた街中を厳かに歩く様子は、宗教に特別の興味をもたなかった誠志に、カトリックへの好奇心をもたせるきっかけになった。

その土地にはキリスト教に関連するいくつかの逸話があり、誠志は切支丹館に展示されている文献や資料を見学することが休日の日課になっていた。

丘の上にある切支丹館は人も少なく、生徒達との忙しい戦いの憩いの場にはうつつでついで、生徒達もわざわざ休日はこのへんぴな場所を訪れることもなく、もっと若者向けの遊び場のあるところへ集まっていた。

ここにいれば、教師としてのしがらみから解放される。彼は館を離れた位置から眺め、三角屋根のアルファベットの『A』を模した建物の、四十年以上も経つのにそれほど傷んではないことを赤茶色のレンガ造りに、ひび割れが少ない外壁から見取った。まだこのままでも十分使えそうだと、誠志は、もうすぐこの建物が取り壊されることが決まった時のことを思い出した。

市の財政難がつづき、国の補助金を得るため、市が提案した『まちづくり事業』の目玉として、観光スポットにもなっていたその切支丹館を新しく建て直す、国の地域再生計画の認定を受けた際の、住民の反発は大変なものだった。

住民達は市が不正に補助金を得ようとしていると訴え、住民への報告もなく提出された申請書類に虚偽があるとして、補助金交付決定の取り消しを要望し、反対派が活動を始めてはいたが、それも虚しく、とうとう今月末取り壊されることが決定されることとなった。それから、毎日のように市民団体が役所の前でデモを起こしていた。キャンドル行列とは違ったその荒々しい抵抗の行進は、彼にもよそごとにはならず、そうかといって、教職を放棄しデモに参加するななどという、職務に反することはできなかった。教師というのではなく、彼は自らを聖職者だと厳しく律していた。

どんな不当な出来事が起ころうとも、職務の末席を汚すような活

動に加わるのは、教育者がしてはならない、可能な限り生徒達の模範としてあらねばならない。そう聖職者の自己にある理性と誓約を交わしていた彼は、生徒達にも慣れた態度を許さないでいた。必ず沢口先生と呼ぶように厳しく言い聞かせていたのは、一度生徒のひとりに彼の、誠志せいしという変わった名前を呼び捨てにされたことがきっかけだった。彼は自分の名前が嫌いだった。学生時代のあだ名が名前だった。その言葉の言い方だけで蔑みに聴こえてしまう損な名をつけられたことを恨みもしていた。

館を離れキリシタン墓地へ歩いて行く。十字をきったキリシタン墓群が、手入れされ整えられた草地に建っている。ここに隠れキリシタン達の魂が、十字の墓下から滲み出てくるようで、恐れ、畏まり、険しい表情で墓群を眺めていると、坂下からこちらへ向かってくる女の姿が目に入ってきた。

「先生、こんにちは」

地味目のオレンジ色の、ボーダーのワンピースにカーデイガンを羽織った久美が、両親を従い誠志の方へ近づきながら丁寧に頭を下げてみせた。彼は両親に向け挨拶をした。

「稲生いなおさん、こんにちは。お久しぶりですね」

「ええ、またいらしてくださいね。お安くしますから」

彼よりも背の高い父親が、久美の背後から猫背をもっと縮ませ会釈した。

「どうですか、枕の加減は？」

首のすわりが良くなり、枕を替えるだけで睡眠に大きな影響があるとは思ひもしなかったことを述べ、彼は家具屋を営んでいる久美の両親に勧められ、自分だけのために新調してもらった専用の枕の出来栄えをおおげさに褒めてみせた。

入学式のすぐ後に行った家庭訪問で久美の家を訪れた際、二階建ての一階部分に並べられた家具のほこりを拭いてまわる彼女を見つけた。その時の久美は、長髪を後ろに束ね、長身を利用し、高いタンスの頭部を背伸びしながら窮屈そうに乾拭きしていた。久美の、

赤いフレームの眼鏡のレンズは埃をまとい、彼女が誠志に気づくと掃除の手を止め、それを恥ずかしがってか、そそくさと家のなかに隠れてしまった。すぐに母親が、洗い物でもしていたのか、捲くついていた長袖を戻しながら現れ、笑顔で誠志を迎え入れてくれた。

室内には父親もいて、居間にはマリア観音が祀られてあり、それが珍しいものだとは知らなかった誠志に優しく説いてやるよう、

「これがあるのはわたしのうちぐらいなんですよ、先生」と自慢げにその由来を語ってくれた。

その次の日すぐにマリア観音について調べようと同僚の、彼よりも先にその土地で教鞭をとっていた松田に教えられ、その週の日曜日、初めて切支丹館へつづく坂道を登っていった。

路面が十分には整備されてなく、アスファルトには地割れを起こしている箇所もあった。丘の下に住む住民達は地滑りの危険を訴え、立て替えに反対していた。斜面の急な上り坂の横では土砂崩れが起こっていたし、速度も思ったほど出せず、複雑に蛇行しながらようやく辿り着いた頂上の、駐車場から町並みと海を見下ろし眺め、誠志は、その古めかしく、懐かしさだけを切り取ったような時代遅れの景色に魅了され、切支丹館に安らぎを求め訪れるようになっていった。

千人塚の前で久美の両親と立ち話をし、誠志がキリシタンに興味を寄せていることが分かると二人して、それならばいっそキリスト教に入信した方が早いでしょう。もっと近い位置でいろいろとお調べになったほうが、細かい情報も集まりやすいでしょう、と勧められた。

「わたしは歴史家ではありませんし、あくまで小さな好奇心ですの

で」
まだ宗教に懐疑的であることを隠し、誠志はそう言って、話題を別のところにすりかえることを考えたが、特別両親の気を惹くような出来事も浮かばず、情けない笑い顔をつくるのがやっとだった。

先ほどまで墓群を囲むシュロの葉の、山風に吹かれているのを静

かに見上げているばかりだった久美が、急に口を開いた。

「もう天主堂には行かれたんですか？」

三人が久美の方を振り返った。

「歴史を感じたいんだったら、ここよりも天主堂がいいですよ」

両親も久美の言葉に従い嬉しそうに頷き、天主堂のロマネスク様式は確かに異国の空間に浸らせてくれるから、先生のような日の浅い人はまず、形から入られた方が分かりやすいかもしれません、と父親が、久美の言葉尻をすばやくつかまえつづけた。

「そうよ。先生がここにどれくらい滞在されるのかは分からないけど、切支丹館や千人塚が気に入ったのなら、間違いなく天主堂にも関心を持つはずだよ」

久美が、むじゃきで、幼く、やわらかな顔つきで、誠志を見つめた。

久美が大人の態度を捨て、彼に対し本来の子供として接してきたのはこれが初めてだった。久美が、いつも一生懸命に周りの生徒達よりも大人であろうと努めていたことは誠志も気がついていて、両親が傍にいるから今日は安心して子供に戻れるのだろう。

「お父さん。先生とお話したいことがあるから、ちよつとだけいい？」

両親は、殉教公園辺りを散歩してくるからと言い残し、誠志にも挨拶を済ませ二人して手をつなぎ歩いて行った。

「仲がいいでしょう？　うちの両親」

誠志は両親の後ろ姿を眺め、深く頷いてみせた。成績も下がっていないし、中間テストの結果も良かった久美の相談といえば、恋愛のことぐらいしか思い浮かばなかった。でも、彼女がそんなことを自分に話すほど気を許してはいないようで、何を相談されるのか、教師として内心楽しみでもあった。

「わたし、十字架って嫌いなんです。クロスって、固く一つにつながっているようでも、重なり合っている部分ってほんの一部、中心にあるたった一箇所だけ」

誠志は、久美の言わんとしていることが理解できず、ただ次の言葉を彼女が話しだすのを黙り待った。

時々強く吹く風に乱された髪を片手で整え直し、久美は誠志の横に立ち、二人は同じ塚の中心を見つめているだけだった。千人塚の石碑の前には真新しい花が供えられていた。ボランティアの住民が定期的に掃除をしているところを、彼も何度か目の当たりにしていた。

「稲生のお父さん達、待つてるんじゃないのか、行かないでいいのか？」

「大丈夫、二人きりの時間を持ちたいはずですから」

誠志が沈黙に耐えかね、久美を突き放してしまおうという狙いは、簡単に受け流され、それ以上彼はなにも話すことがなくなってしまう。

「先生はもうわたしのことを愛してるって、思っていたのに」

彼を背にし、歩き出した久美が塚の、段数の少ない石段を降りきったところで向き直り、なにか呟いていたが、誠志の耳には届かなかった。それでもいいのだというふうな、投げやりな態度で、挨拶もなく公園の方角へ目をやり、両親の向かった後を追うわけではなく、ひとりで散策でもするような、移り気な歩き方で、時間も気にせず、ゆっくり道なりに沿って曲がっていった。

久美の行き先を目で追い、そこから坂下に覗ける寺を一瞥し、誠志はついに水面下でくすぶっていた難題が、久美の一言によって明るみに曝されたことを意識せずにはいられなかった。

久美が自分に好意を抱いているのでは、という疑いは以前からあった。でも、人間は自分の都合の良いような解釈をする精神の働きがあるから、半信半疑でいるほうが案外物事の本筋から外れてしまうことが少ないと考えていた彼は、そのことに深く触れようとはしないでおいた。そんな自分の態度にしびれをきらし久美があんなことを言ったのなら、自分の推測は間違いではなかったことになる。入学当初から、久美から感じていた根拠のない不安感はいくらだった

のかと、彼も石段を下り、数台停めたらすぐにつまってしまふ駐車スペースに置いてある、自分の軽自動車に乗り込み、今日は明徳寺の石段に刻まれた十字を踏みつけながら、じっくりと拝観するつもりだったのを取り止め、寺を素通りして帰ろうと、考えが変わった。

切支丹館取り壊しに反対する市民団体の活動は過激化し、市長への脅迫の手紙まで送られたことが地元紙で報じられたが、それが本当に市民団体の送りつけたものか、その証拠も示されておらず、誠志はその記事の全てを信用する気にはなれなかった。

市民団体の中心人物の一人である、地元の歴史研究家である、佐々木教授と面識があったことも理由のひとつだった。

七十歳を越え、なおも歴史探求への意欲は衰えず、熟考冴えわたる教授が、自分たちの不利になるような安易な阻止をやるわけがない。そう決めつけ、誠志は新聞の記事は市よりの記者が書いたものに違いないと、そこで新聞を畳み、卓上に放った。

隣の、英語教師で、誠志と仲の良い松田が新聞を拾い上げ、誠志が読んでいた紙面を開いた。

「ああ、これか。老朽化しとってたってな。四十年も経つなら無理もなか」

「いや、市は耐震調査もしたらんって話らしい」

「PH測定か。でも古か建物ならアスベストの問題もあるとやる？」

誠志は、切支丹館にアスベストが使われている箇所も確かにあるが、市民団体が専門機関に調査を依頼した結果、取り壊す必要はないという報告がなされたことに加え、当初改修だけのはずだったのが、改築に変更されたのは、市側の思惑が先行し過ぎたためだということ、矢継ぎ早に説明した。

「なるほど。改修なら一億、改築事業に変更したら七億円の援助金が入るんか。なら、そうするわな。市は合併しても赤字は残ったままやし」

松田はこの土地の出身であるにも関わらず無関心すぎる、と彼がもつこの問題を取り上げるべき必要のあることを訴えた。

「でも、反対派なら自分たちに不利な証拠はださんやる？ アスベ

ストのことにしても、専門機関ってどこのどいつらのことや？」

誠志は、市が調査をせずに改築が必要だとした根拠が薄いこともまた事実だ、と力説した。

「沢口は反対派か。頼むから仕事休んでデモなんて真似やめてくれよ」

笑いながら誠志の肩を叩き、まだ授業開始のチャイムは鳴っていないが、松田はそのまま職員室を出て行った。

誠志は、自分が反対派よりの思考になりつつあるのを危惧していた。自分は思い込みの激しいところがあるから、一旦そうならしまえば間違はなく職務放棄し、反対活動に従事する可能性がなくなることを理解していた。

ひとりの人間に大勢を突き動かすような、強力なちからを持ったものなど、それこそ特別な存在としてある人物なのだろうから、自分のような凡人は、せいぜいなるようになっていく世の出来事を後追いするしかできはしないだろう。

チャイムが鳴り響き、彼は教科書を手に立ち上がった。授業が始まってしまえば、余計なことを考える隙間もないほど熱中し、生徒のために国語を教え込んでやるのが、今自分に出来る精一杯なのだ。そう意気込み、今日最初の授業へ向かうため、三階の三年生の教室までの階段を、勢いをつけ駆け上がった。

三年生の二学期となれば、もう大学受験までの追い込みが優先で、残りの授業も駆け足で行い消化するのみで、ほとんどの時間を模擬テストに費やしていた。誠志も受験対策に力を入れていたから、授業開始から十五分の小テストを、繰り返し生徒にやらせていた。

小テストの答え合わせの途中、小説の心情を推察する問題に、ひとりの生徒が疑問をぶつけてきた。

「なんで問題の製作者と自分の意見が一致せんと点数がもらえんですか？」

思春期にありがちで、誠志のような大人にはありきたりな、もう何度も尋ねられた、それでも、彼らにとっては正当で、素朴な疑問

に、彼は前もって用意して置いた、彼自身の見解を述べ始めた。

国語教育は、特におまえの抱く疑問には答えを与えてやれるほどの全能性はない。それを考えることこそが、柔軟で、吸収性の高い学生時代に最も必要なことなのだ。だから安易に答えを求めようとせず、あえて苦しみのなかに身を置いてみる。不条理さに悩むことで、人格はより形成されるのだから。

彼の、ひとりよがりな熱の入った言葉は、生徒達にはいまひとつこたえなかったようで、別の生徒が、「先生、じゃあ答えにあるような考え方に、おれ達を誘導しようってことなんか？」別の生徒が続いて言った。

「そんなこと考えだしたら国語の成績が落ちるわ。先生おれ達は混乱させんでくれよ。大学受験に落ちたらどうしてくれつとや」

誠志は、少なくとも自分にはそんなつもりがないことを、「冗談めかしく答えた。

「いつとくけど、おれは日教組じゃないからな」

教室中に、いっせいに生徒達の笑い声が響き渡った。

昼休み、今度の中間テストの問題を考え、去年、一昨年の傾向から、誠志なりに本番の受験のやまをはっていた。

前任の、国語教師の試験問題を参考にし、自分なりの改良を加え、より有用で実践的な問題に作りかえてやろうという野心から、手元にあるだけの参考書では物足りないような気がして、もっと何か役立つものでもないか考え図書室へ向かった。

途中の廊下で久美と尚子がおしゃべりをしていた。その前を横切る際、ふたりは笑い声をいっそう高くし、誠志が通り過ぎるのを見送っていた。彼は久美と視線を合わせないよう努めた。久美が自分の行き先を先回りしているようで、彼はどうしても神経が高ぶつてしまい、腹立たしさが勝り、三年生に出す今度のテストは難しいものにしてやれ、といった理不尽な悪意まで生じてきた。

何もされていないのに、誠志は久美にしてやられたようで、あま

り子供だといって軽んじていたら、いつか本当にとんでもない目に遭うような予感があった。視線は目指す先におき、素知らぬ態度で通り抜ける。そういった対応をとる時点で自分がどれくらい久美のことを意識しているのかが窺え知れるので、誠志はさらに落ち着かなくなる。

田舎の学校の図書室では、やっぱり何の収穫も得られず、ただ久美から受けた不快感だけが彼の手元に残った。すぐに戻ってしまうとまた久美が廊下に居そうだからと、誠志はもう少し粘ることにした。本棚の下にある辞典を開くと、小さく薄い白色の虫が、旧字体の文字の上を斜めに横切ろうとしている。誠志は辞典を閉じ、虫が潰れて小さなしみになるところを空想しながら、両手で強く押さえつけた。

図書室から職員室へ戻る途中、誠志は来た時と別の道を通ることにした。二階の奥まったところにある図書室から、そのすぐ下にある職員室までの階段を使わず、久美のいた廊下を通らずに済む、遠回りな道順を選び戻っていった。

天主堂は日曜礼拝の人々で賑わい、そのなかにまぎれ、彼は初めて教会内で祈りを捧げた。マリアやイエス、神といったものではなく、ただ何かに救いを求めたい心境から、無心で祈った。自分の人生が万事巧く運ぶようにと。

見知らぬ信者達にまぎれ、彼は聖堂内の、正面扉口に近い後ろの席から、主祭壇に立つ神父の頭上に飾られてある、ガルニエ神父の姪が描いたという『受胎告知』の絵を遠目に見ていた。右の、両手を胸に当てている女性がマリアで、左の、羽を生やし、人差し指を顔の前に置き、腰を屈めマリアに話しかけているのが天使ガブリエルであることは、前もって調べておいたから、彼はその絵が何を表しているのかを知っていた。そして絵が飾られている天主堂を建てた人物の名も調べ上げていた。

長崎県出身の、当時教会堂建築の第一人者であった鉄川与助てつかわよすけの手がけた天主堂は、それまでのロマネスク建築よりも光を多く取り入れた明るめの内装で、側面の半円アーチの窓には、三色の色ガラスがそれぞれはめてあり、その上部にある丸窓も同色で揃えられ、天井は明るめのパステルカラーでまとめられ、陽ざしがほどよく室内に射し込む窓際で聖書も持たず、朗読もせずに、聖堂内を物珍しそうに観察するだけの誠志を、隣の、彼よりも背の高い外国人の男が、訝しげに何度も横目で見ていることによりやく気がつくのと、彼は急に居たたまれなくなり、ミサが終わるよりも早く、扉を静かに開き、そっと聖堂を出た。

一息つき、白亜の天主堂のてっぺんにある十字架を見上げていると、久美の不可解な言葉が思い出されてくるばかりで、それを振り払うよう視線を降ろし周りを見回せば、教会から出てくる信者達のなかに、田舎では珍しい外国人の姿も、ここでは特別な人種ではないことに思いがけず気づかされた。この土地に、いままでこんなに

大勢の外国人が住んでいることを、今もって彼は知った。

ロザリオ館の展示品をじっくり見学するつもりでいたから、誠志は開館に合わせ、本渡から一時間半もあれば着くだろうと予測をたて、ドライブコースとしても最適な田舎道は混雑もなく、時折スピードメーターが100を指すこともあるほど快適な道程だった。

大江天主堂からサンセットラインを進むと、海中公園付近に西平椿公園がある。山はもうそろそろ椿の季節になるうとしていた。天主堂からロザリオ館に下る歩道の、高い樹木の隙間からでも垣間見えるくらい、広範囲にわたり椿林が群生していた。

田舎道の、足場の悪い歩道を慎重に歩いてきた彼に、同じく礼拝に訪れていた久美の父親が、後から声をかけてきた。

「先生もついにキリスト教に入信なさったんですね。教会内でお見かけしましたよ」

「いえ、わたしはまだその手続きというものをしていませんで」

「まあ」

母親が口到手を当て、おおげさに驚いた。

「日曜礼拝のときは、一般の見学は禁止されているのをご存知なかつたのですか？」

「どうやって礼拝堂に入り込んだんです？」

久美が含み笑いで訊いた。それには答えず、誠志は、母親の問いかけだけに答えるのだといわんばかりに久美から視線をそらし、母親の整った綺麗な顔立ちの、彼女と同様に、一番印象的な奥二重の黒目から視線を外さずに、

「わたしはただ正面の扉から入って来ただけで、それにわたしを止める係りの人もいませんでしたので、てっきり自由に見学ができるものだとはかり思っていました」

久美が強引に彼の視界に飛び込み、

「でも、これで先生もキリスト教徒の仲間入りを果たしましたね。だって礼拝までしたのだから、もう入信するしかないですよ」

久美の両親も執拗にそう誘ってくる。誠志は考えておくとだけで、

後は言葉を濁し、それよりも、自分は天主堂について語り合いたいのだと、天主堂を訪れた感動を早く誰かに話したくって、むりに話をその方向に持っていこうと、勝手に感想を述べはじめた。

「教会内もそうですが、建物自体もまだ綺麗ですね。明るめの、灰色の屋根に、真っ白なコンクリート造りの外壁。あれを白亜というんですね。一応予習はしてきたのですが、実際見ると、写真とは違った、なんていうんでしょうか、線の自由な造りの建物に、特別な感慨を持ってしまいました」

彼が、上等な言葉も浮かばずに、国語教師として恥ずかしく、はかんでいるのを受け、両親も微笑み、予習という言葉がいかにも教師らしいと、お互いを見合い、そこに和やかな場をつくる相槌をうつてみせた。三人の笑い声が共鳴するのを遮るように、久美が、

「そうだ、お父さん。ルルドの聖母像も見せてあげたら？」

誠志は思い出したように、「ああ、フランスに本元があるっていう……」

「先生。本物なものにも、ここにあるのもルルドですよ」

形に囚われるのはいけません。父親が、確かにあれは模したものではあるが、その御霊は本物と幾分相違ないことを誠志に説いた。

岩場の高い位置にある洞窟に、影を落とす緑葉の茂りに、藤の花が点々と咲いていた。マリア像の足元には苔が生え、そこからわずかに湧き出ているのがルルドの泉と呼ばれるもので、両手を胸のところまで重ね合せ、正面を見据えるマリア像の下方には、ひざまずき祈りを捧げる少女、ベルナデット・スビールの像があった。離れた位置からマリア像を仰ぎ見る少女の像は、正面ではなく、斜め下に置かれているのにも、なにか特別なわけでもあるのだろうか、彼は憶測を巡らせた。

一礼し、父親にルルドの、奇跡の泉の伝説を話してもらいながら、誠志達は狭い遊歩道を、ロザリオ館を目指し、二列に並んで歩いていった。先頭でしゃべる彼と父親の後を女ふたりが着いてくる。それでも時々久美だけは、男同士の会話に割り入ってきた。それをう

つとつしくおもいながらも、彼は、彼女と視線が重ならないよう努めた。

ロザリオ館の入り口には貼り紙がしてあり、内容は殉教祭の告知で、そこには白いヴェールを被った幼い子らが、両手で大切そうにギザギザの、厚手の色紙に包まれたキャンドルの炎が、風に消えないうよう、大切そうに前傾姿勢で歩いている写真が載っていた。

十月の第四日曜日に、夕方四時からまず、千人塚にて仏式法典が執り行われ、その後同じ場所でカトリックミサが行われ、それも済むと、ようやくメインのキャンドル行列が始められる。天草・島原の乱で犠牲になった人たちの霊を、神式・仏式・カトリックの宗派を超え慰霊し、同時に平和への祈りを捧げる名目で行われる、殉教祭の行列が、千人塚から祇園橋きおんに辿り着いたところで、幼い子達が、花びらを橋から川へ振りまき、そのまま到着地の本渡カトリック教会へ進み、ミサ終了後、花まきの少女たちが、マリア像に花びらの雨をふらせると、殉教祭は終わりを迎えることになる。今年はミサの後にゴスペルのライブも行われる、と書かれてあった。

キリスト教の教えにある戒めに、現在の自分に降りかかる問題を解決してくれそうな文句があった。聖書を読むのは初めてだった。昨晚で三分の一ほど読み進んでいた。キリスト教に信心すれば、自分の中の誓いとは違う、もっと強力な誓約を、自分と久美の間に築けそうな気がした。

広い空間の館内にある、ひとつの展示品の前で立ち止まり、久美の父親が彼に手招きし、ガラスケース越しのマリア観音像を指差し、

「どうです？　うちにあるのと違わないものでしょう？」と誇らしげに誠志の同意を求めてきたが、彼はほかの展示品が見たくって、適当に父親の喜びそうな感想を返し、満足そうに頷く父親を残しその場を離れていった。

照明の暗い館内でも、展示品には強く光が当てられていた。かくし部屋の前を横切ると突然、オラシヨの祈りが流れ、反射的にその方を振り向いたら、柱にある、十字架に祈る実物大の人形の復元ジオラマが、ひと際照らしだされて彼の網膜に焼きつけられた。祈りの声は、センサー感知で流れるしくみになっており、彼がかくし部屋に近づきすぎたために、勝手に驚くはめになり、誰もそれを見ていなかったことを、ひとりで安心していた。

さらに展示品を見てまわる。香炉の内にマリア仏と十字架が刻まれたものや、仏像が十字架に変わるからくり、キリシタンの葬儀に使われた経消しの壺など、様々な工夫を凝らし隠れキリシタン達が禁教時代を過ごしてきたことが窺える品ばかりで、時間をかけ、一つ一つ展示品の説明文を読んでいくと、いつの間にか彼は、入り口に辿り着き、館内を一周していた。

そのまま正面玄関を抜け、ロザリオ館前のベンチに腰かけ、丘の上を見上げ、南国系の樹木が多く、ブーゲンビリア、パンジー、ピオラといった鮮やかな色彩の、冬咲きの花が広がる天主堂の庭に、春先になればヤブツバキがもつと色数を増してくれるから、そうなれば複雑で、目にうるさいくらいに天主堂を引き立て飾りつけるはずだった。

ヤブツバキが天草灘に沿ってあるのが、天主堂からでも一望でき、

温暖な土地柄もあり、山の斜面に自生したヤブツバキ林は観光に役買っていて、毎年三月には椿まつりが開催され、他の特産品と並び、名産品として椿油も売られていた、その時の光景を彼が懐かしく思い浮かべていたら、そつと久美がひとりで彼の隣に座り、「疲れたんですか？ 顔色良くないですよ」

肩にかけてバックからハンカチを取り出し、誠志の額を拭おうとするのを、彼が手の甲で遮り、大丈夫だからと、久美の細い手を押し戻した。

「……心配してやってるのに」

「余計な気づかいはいらん。それより、またお父さん達を置いてけぼりにしたのか？」

久美は苦笑し、「置いてかれたのはわたしの方です。あのふたりにはわたしは不要なんだから」

誠志はそういえるだけの根拠があるのか訊いた。家のなかでも手をつないだり、キスしたりしている姿をみれば、誰だつて疎外されたように感じるでしょう。両親の仲が良すぎても子供には悪影響になることもあるんですよ。

誠志はそれで久美が自分に父親代わりをさせようとしていることを納得した。そういうつもりで愛しているならば、なんとか久美の期待に答えられそうだとも考えた。

ロザリオ館に下りてきた人々を指差し久美が訊いてきた。悪魔とはなんですか、と。彼が、角を生やし、毛むくじゃらの、牛みたいな姿の生き物を連想し、そう答えた。

「違いますって、そんなこと訊いてんじやなくて、この人達ですよ。悪つていうのは、遠いおとぎばなしや、神話にでてくるやつじやなくて、ふつうの、にんげんのことを訊いてるんですよ」

そんなことに頭を使わず、もつと別なことに興味を持って、と彼がいうのを、「先生が言ったでしょう、悩んで苦しめつて」と素早く切り返した。

黙りこむ彼に、久美が祇園橋に連れて行ってほしいと頼んできた。

誠志が、それなら両親も誘うべきだというのを制し、もう許可はもらっています、なんなら今携帯で確認してみましようか、とあきらかに不愉快な様子を見せた。

どう考えてもそれは久美の虚言であることは想像がついたし、それでも誠志はやっぱり両親にことわっておくべきだと譲らなかつた。わかりました、と久美がロザリオ館の前にある、特産品売店に立ち寄り、みやげものを選んでいた両親のもとへ駆けて行き、両親に話しかけると、ベンチに座りその様子を眺めていた誠志の方を見やり、両親がそろって軽く会釈をした。

勢いのついた足取りで、久美が肩で息をしながら、両親の許可はもらえましたから、もう大丈夫です、と汗ばんだ手で、彼の手をとって、ベンチから腰を上げるように急かし、彼よりも先に、ロザリオ館の駐車場に停めてあった車の助手席側に立ち、ドアのロックが解除されるのを待ち構えていた。

「先生の車って飾り気がないですね。今度なにか、アクセサリーでもあげましようか？」

さつさと助手席に座り、手の届くところ全てに触れ久美が楽しそうに、車内の模様替えを提案しているのを、誠志は何の気なしに聞き流し、祇園橋近くにある有料の駐車場が混んでいてくれればいいのにと願っていた。

久美が助手席に座ったことで、海を近くで眺めることができなないと、残念がっていたものの、その表情にはみじんもそんな色はなかった。むしろ海を眺めるために、誠志をまず視界に入れなければならぬことを嬉しがる素振りさえ窺えた。

昼時の、西海岸の反対車線は混んでいて、本渡へ帰る道は通りがよく、早く久美を座席から降ろしたい彼にとっては好都合だった。久美が、クラスの名をひとりずつあげては、あの子はナルシストだ、あの子のつけている香水が鼻に障る、あの子は陰気だ、つまりはクラス全部の男子をけなし、誠志がいるせいで、彼女は交際相手を見出せない、その責任を押しつけようとしてくる。彼にと

つては見当違いも甚だしく、いいかげん、その話題は飽きていたの
で、相槌だけうち、本渡までの帰路を、無言で車を走らせていた彼
の視界を、ガソリンスタンドの看板が横切った。熊本市内から本渡
までに掛かる輸送費のため、熊本市よりもガソリンの値段は高く、
看板から数字が取り外されていた。

山間は切り開かれ、次々と住宅地にされると、誠志のような余所
者が住居を構えるようになり、それに伴い土地の値段も上がり、家
賃も熊本市内と変わらないほどに跳ね上がっていた。実生活の、些
細な、それでも身に迫る不安に誠志が耽り始め、提供する話題に、
彼が全く興味を示さないので、やがて久美から退屈そうなあくびが
洩れると、彼はふと、我に返り、強張っていた神経が、幾らかほぐ
れているようだった。

中央新町の廃れた商店街の駐車場は空きだらけで、そこに車を停め、祇園橋のある山口川に沿って歩いていった。四十五本の桁脚で支えられた石造りの橋は、自然の石を切り出したもので、所々に隙間があり、見た目ぶさいくな造りに見えるのだが、石板に足を踏み出せば、石柱は頑丈で、めったな川の氾濫では崩れそうにない力強さが、足元に安心感をもたらしてくれる。実際、今日まで崩壊もせず失われずにあるのだから、橋の造りは確かなものなのだろう。

祇園橋を渡りきり、祇園神社とは反対側の川沿いを歩き、時々後からついてくる久美を見返りながら、彼は、車を降りてから一言もない彼女の大人しい態度が、気がかりでしようがなかった。

神社の石段を腰かけ代わりに、小学生らしき男の子達が、食べ終えた菓子の容器を神社の溝に投げ捨てていた。それで、もう昼飯時だということが、彼の頭のなかに浮かび、空腹感を覚え、続いて腹が鳴った。

「悲しみの入り」

誠志は振り返った。

「灰の水曜日って意味なんですよ。隠れキリシタンはね、キリスト教の行事がばれないように、そうやって言葉を変えて自分達だけの信仰を守っていたんですって。さかさ観音とか、潮隠しクルス、仏像の蓮台をはずすと十字架が現れるからくり、うちにあるマリア観音だってそのひとつ、ちなみにクリスマスはご誕生、イヴはご産待ち」

「それで、灰の水曜日ってのはどういうことをするんだ？」

「さあ、そこまでは知りません。わたし、そういうのに興味はないですから」

久美は山口川の水流を眺め、「この川の流れが止まってしまいうくらの死者が出たんだって。想像できません、先生」

誠志は答えず、橋の向こうに見える神社でたむろしている男の子達を眺めていた。川の水位は最近の、突発的に降る大雨で上がり、濁流は未だ止むことをしらなかった。

『天草の乱激戦之跡』と刻まれた石碑は、今でもはっきりと文字が読みとれ、風化せずにある。

久美が、なにか呟き、橋の下へ祈る、その姿勢の良い姿には、普段の彼女から漂う邪気の欠片も見られなかった。

誠志が、日曜日はいつもこんなふうな家族で過ごしているのか、友達と遊びに行ったりはしないのか、と訊いた。久美は、そんなに親しい友達はいない、と言い放った。

「佐藤がいるだろう？ 稲生はいつも佐藤と一緒にいるじゃないか」
久美が、ああ、あれ。尚子ちゃんは都合がいいから傍に置いてくれるだけ。友達というんじゃないです。わたしに告白しようとする男子どもを寸前で食い止めてくれる壁の役割なだけ。尚子ちゃんだって、わたしのことを利用して、男友達を増やしていったから、お互い様。

誠志は、久美の今までとは違ったふてくされた物言いに、不覚にも久美を自分と同じ立場にまで引き上げていた、自分の浅はかさ至今気がついた。そして引き上げたのではなく、自らが久美のところまで降りていったというのが正しい見方だとも思い直した。

そうして見ると、久美の今までの生活態度は極端に素行の良すぎるよう思われてきた。子供が大人の顔をしている時は、まず背後にある原因を疑わなければならぬことを学生時代に学んだはずなのに、いざ実際の現場に入ってしまうと、教育以外の忙しさに、児童心理学などに書かれてあった、金言のような文句も簡単に、思考の隅に追いやられてしまっていた。

「友達をそんなふうにするなよ」

だから、友達じゃないんだって、と久美は苦笑し、彼の青臭い感情を嘲笑した。

「先生、気がついてますか？ わたしがこんなふうな言葉を汚くし

て話すのは、先生とふたりきりの時だけだってこと？」

「お父さん達に厳しくしつけられているから息抜きしたいんだろう？」

先生はやっぱり日の浅い人ね。そういつて久美が、先生は半分わたしのことを好きになっているから、目が曇っているんだわ。それはわたしにとっては喜ばしいことだけど、先生には屈辱でしょうね。

久美が、小さく、それでも昼時の車や人の築く雑音に負けないくらい透る声で、低くせせら笑うのが、また彼の心を攪乱させた。

この間と違い、好き、という言葉が彼女が選んだことが気にかかり、そのことばかりがいつまでも彼の思考にこびりついていた。

教頭の鈴木は、自らを鈴木重成の子孫だとふれまわっていて、誠志が赴任した頃から重成の記念碑を建てるための会を立ち上げ、自らが発起人となり資金集めに、彼や松田達教師も巻き込んで寄付を求めていた。松田からは、余所者の教頭にはたいした伝も権限もないから断わったところで、いやがらせなどはできないから安心して断われ、と言われていた。実際、誠志は今までに一度も寄付をしなかったし、教頭からならんら圧力もなかった。

教頭がこの土地において余所者扱いされていたのは、本当に土地の出身者ではないからという、単純な理由からだった。だからこそ馴染みの薄いこの土地に劣等感を抱き、なんとか自分の権威を築こうと、教頭は重成の子孫という話を持ち出し、この土地の人達に取り入ろうとしていることが、周りからの噂で誠志の耳にも伝わってきていた。

教頭は、鈴木という苗字だけが同じで、他には子孫だということこれといった証拠もなかった。年配の教師に訊けば、教頭の親戚もここにはいないという答えが返ってくるだけだった。

その重成が英雄扱いされるきっかけになった、天草・島原の乱の際、命を挺し村民を救ったという逸話も、最近歴史研究者によって、その証拠が全くないことから、信憑性は薄く、偽りである可能性が高いことが分かると、教頭の立ち上げた会の勢いは衰え、会に寄付をするものは激減し、それでも諦めず、教頭は少数の協力者とともに、現在も活動を続けていた。

歴史研究者として長年に渡りこの土地で活動を続けている佐々木教授から、誠志は切支丹館改築に反対する市民の会に加わるよう何度も催促を受けていたが、教師という立場を理由にそれをやんわりと断りつづけていた。

佐々木教授は、重成の英雄伝の偽りを指摘した研究者の一派で、そ

れで教頭は最初のうちは、教授と親しくする彼のことを、反対派だと決めつけていたが、一度教頭の前ではつきりと、自分が中立の立場を守っていることを、その理由とともに述べてやったら、それしばらくは何も言っておなくなった。

佐々木教授とは二週間前に天主堂であつたきりで、その際、市が天主堂を、国の重要な文化的景観に指定するための申請を目指し、来年にはその調査が開始されるということを知られた。

「これで、天主堂だけでも救うことができそうだ」そういつて、もう自分が若くないこと、自分が死んだ後の土地の将来を嘆き、教授は、誠志達若者に、自分達の活動の後を継いでほしいと頼んだ。彼は何も答えられなかった。

文化的景観の指定を国から受けることができれば、いずれ世界遺産への登録を目指すことになるだろうから、そうなるというんな制限が天主堂に課せられ、自由に利用できなくなる可能性も大いにある。保存という側面から考えると正しい判断にも思われるが、保存のために、別のチャペルを建設し、それを維持するのに多額の費用がかかり、補助金がでも以前より負担が増した、他の教会の例を知ると、彼はどちらがいいのかまた悩みはじめた。そういえば、西平の樁も市指定の天然記念物であることが、それらに引っぱられるよう、浮揚してきた。

肘をつき悩む誠志の机は、教頭の席から離れた場所にある。机の前に置かれた教科書や資料などが目隠しになり、教頭の顔をじかに見なくて済むので、わざと整理もせず、だらしなく机の上を散らかしていた。となりの松田は彼の思惑とは違い、教頭や校長の前でも無遠慮な態度を崩さない自由人だったから、単なる片づけ下手が机の上を汚くしていた。

松田の、山積みされた参考書や辞典が、大きさも異なるそれらはなぜかバランスよく崩れる気配もなかった。誠志の机にまで侵食していた松田の本を慎重に押し返しながら、誠志は教頭が自分に声をかけてきたのに、すばやく手を止め、横を向いた。

教頭が最近の調子はどうだ、と訊いてきた。これから本題に入る時の予備動作、もしくは準備運動のような言葉に、彼は決まり文句の順調です、を返してやった。

「そう、順調か。そういや最近は、佐々木さん達と会ったりしてるのか？」

ほらきた、と誠志はそれでも気のないふうに、いいえ、と答えた。「うん、ならいいんだが、あんまり他人を悪く言いたくないが、君は佐々木さん達と親しくしないほうがいい。沢口先生の耳にはまだ入っていないだろうけど、ほかの教師達の間ではうわさがたつてな、君と、井上先生が同土だつていうものまで出てきて、わたしはそんなことないと信じとるけど、君にまで学校を休まれちゃあ、代わりの先生がもういないもんで、それで一番困るのは誰かっていったら、そりゃ生徒達なんだから、君はもつと自分の職務に専念せんか。もう天主堂やキリシタンなんかとかかわらんほうがよかぞ」

教頭が誠志の肩を軽くたたき、念を押すように、もう一度肩に手をかけ、指先に力を込めた。

「わたしは中立の立場です。切支丹館や天主堂に訪れるのは、この土地にできるだけ馴染むことが、ここの生徒達の気持ちを理解する最も有効な方法だと考えただけで、他意はありません」

「わたしもだよ」と教頭は、鈴木重成を引き合いに出し、自分のルーツを知ることが、余所者のわたしにとつても、この土地の住民と分かり合う最善策だと信じているから、重成の像をわたしが発起人となつて建てたいんだよ。そうつけ加え、君がわたしの会に協力をしてくれれば、君にも重成の恩恵があるかもしれない、と思わせぶりな一言を最後につけたし、職員室を出て行った。

誠志は、重成の恩恵という言葉に、教頭がいかに重成の影に自分の尊敬や感謝を期待しているのが、はっきりとしたかたちで覗けたことに、思わず笑い出しそうになつてしまった。虚栄心の塊、と彼は呟いた。しかし、なぜ自分なのだろうか、松田ではないのは納得できる。彼ならずぐに断つてしまい、さらに教頭の胸中にある利

己的な感情までも指摘してしまうことは容易に想像がつく。そうすると、自分にはどこか付け入る隙があるために、佐々木教授や井上先生、敵対する教頭までも目を付けられる原因が、自分の中立的な立場にあるように思われてならない。その考えが明確になるにつれ、彼はやはり、自分は右か左かを選ぶしかないのかと、失望の境地に至り、気持ちは沈みこむばかりだった。

休み時間、一階の渡り廊下の、外から隠れたところで、久美が男子生徒とふたりでいるのが、男子生徒が稲生さん、と呼んだので、誠志は反射的にそちらに目をやってしまった。

もう何度もそういつた、偶然を装い誠志の視界に入り込もうとする久美のやり方にはうんざりしていたので、誠志はすばやく向き直り、気づかないふりを決め、通り過ぎようとしたら、久美がはつきりと、こちらまで届く大きな声で、「あんたみたいなガキとは付き合えんわ」と男子生徒を怒鳴りつけた。誠志が、予想外の大声に驚き、そちらの方を振り返ると、久美がしてやったりのにやけ顔で、彼が久美を見るよりも速く、誠志へ視線を送っていた。

彼は悔しがり、腹に込み上げてくる苛立ちをこらえ、何も聞かなかったことにして、次の授業のある教室へ歩き出した。久美にも、右か左か結論をつけなければならぬことが、切実な問題であることを、彼が痛感すればするほど、出口のない苦悩に追い込まれていくようで、その脇にある、自分の男としての気持ち、久美に惹かれつつあることを教示していることを認めることが、彼を本当に苦しめている原因であることは明らかだった。

くだらない。こんなことに振り回されるなんて自分らしくもない。しかも自分の教え子だというのに、ここ最近の落ち着かない心地ときたら自分でも呆れるくらいだ。

しかし稲生だけにはどうしても、あの学生時代にあつた初々しい感情を捨てきれないどころか、あれが再び身を感じられたことの懐かしさに、嬉しさまで覚えているではないか。そんなことをするた

めに自分は教師になったのではない。忘れる、校内では自分が男であることを忘れてしまえ。教職者、聖職者、サラリーマンではない、自分の目指す先は教師を越えたところにある、と誠志が必死に抵抗すればするほど、彼がいかに久美に縛られているのかが、彼自身、より強力に意識されるだけで、柔軟性のない自分の思考が疎ましくて仕方なかった。

それから、いつか、久美が訊いてきた悪魔についての考えが、彼の脆い意思を貫き、風穴を開け、あの問いかけの意味が、おぼろげながらに、彼女の本性に少しだけ近づいた、かすかな手応えを与えた。

日本史の教師が未成年の女と交際していた事実を職員会議で知らされた時の誠志は、自分の身にもいつか起こりそうな心境でいたから、決して他人事にはならず、腹の奥に軽い罪の痛みを覚えながら、校長が話す内容もろくに耳に入ってこないまま聞き流してしまっただった。

日本史の教師は幸い、と前置きをして本校の生徒が相手ではなかったので、本人の希望もあり二、三ヶ月の停職に留めようかというのを、松田と誠志を中心とした数人の教師が、それでは示しがつかないと頑固に反対を続けた結果、校長も保護者からの追求を考えたま、日本史の教師を切ることでようやく話は纏まった。本人不在での決定になったが、学校のなかで誹りを受けながら過ごすほど面の皮の厚い性格ではなかった日本史の教師は、校長の下した処分に不服もなく退職していった。

そのことがきっかけで学校中に援助交際のうわさが飛び交うようになっていた。

大抵は根も葉もない、ただの嫌がらせでうわさだけが広まっただけのものだったが、うわさだけでも充分に他人を貶めるだけの効果はあったから、誠志達教師もそういった話題をきつく取り締まるよう言い渡されていた。

うわさの対象になるのは女子のなかでも特別な存在ばかりで、恋敵やいじめの対象がほとんどを占めていて、うわさを広められ不登校になるものや、気の強い子はあえてうわさを否定もせずに正面きって登校していた。

校内では同性からの人気もあつた久美さえ、うわさの対象にされていて、誠志は無論信じるほどのことでもないとうわさの出所を探ることはしなかったが、久美に惚れている男子を好きな、恋敵の女子がそんなうわさで足を引っぱるうとしていて、それを毛ほども気

に留めない久美のすました顔までが想像できるくらいに彼は安心していった。

その週は久美と両親に遭うことを考え、外出は控えておいた。夕方に受け持ちの男子が

万引きで補導されたと連絡を受け、誠志は夕飯を食べ損ない、警察署から両親と生徒を見送った後、ファミレスに一人向かった。

この界限では若者の溜まり場となっていることは知っていたから、あまり気が進まないでいたが、そんなことを気にしている自分がかえって彼らを遠ざけているような気もしていたから、今時の若者を見物する構えで店内を見回すと、去年、一昨年に見た顔がちらほらと浮かんできた。特別に関わりがあったわけではない連中だったのもあり、彼らも特別には誠志を意識している様子ではなかった。

家族連れの生徒は気恥ずかしそうに、気持ち俯き加減になっているようでもあった。

そろそろ店を出ようかとしていた時カウンターに、空席待ちをしている久美と両親の姿を見つけると、誠志は反射的にトイレの方に身を傾けかけたが、まっさきに久美に見つけられると、何食わぬ顔をつくり、両親に挨拶をしに歩きだした。

今日の不参加について両親が心配そうに訊ねてきたが、これといった訳があるのではなく、ただそんな日もありますと答えたら、両親は信心というものは決してそういつたいいい加減さが前にくるようなものではありませんと、軽く窘められ、そこでさらに言い訳がましくしても、よけいこの場に引き止められるだけだと、その場は両親の言葉に素直に従い、誠志はそれから、すいませんを相槌に二人の宗教観を熱心に聞き入るふりをしていった。

空席を待つ両親と別れ店を出た彼の後から、久美が当然のようについてきているのを、今更真面目ぶって突き放すのもくだらなく、後ろに聴こえる足音を取り合わないようにして、車まで歩く誠志の背中に、援交の誘いを受けた話を聴きたくないか、と久美が訊くので、教師として無視する訳にもいかず、はたして疲れた神経で彼女

の話最後まで落ち着いて聴いていられるものか、それが彼の煮え切らない態度に表れたから、久美が聞きたくないなら別にいいです、と立ち去ろうとするのを慌てて引き止め、結局彼の方から彼女に話を訊く形になってしまい、久美は先生がそういうなら、と図々しくも誠志に恩を売ろうという魂胆が見え透いて彼をいらつかせた。

久美は、誰にどのようにして誘われたのかは言わず、まるで作り話でもしているかのように、彼女の話にでてくる人物には輪郭がないように誠志には思われた。

「で、知ってますか？ その子が言うには、わたしはランクが一番上なんですって。だから、ただ一緒に食事したり、腕組んで歩いたりカラオケ行って歌ったり、それだけであの子達よりも多くお金を稼げるんですって。容姿が悪い子は当然体売らないと買手が見つからないけど、わたしみたいのになると、多少無理を言っても喜んで金をだしてくれる男はいくらでもいるから、楽して金を稼げるって誘われたけど、ちゃんと断りましたよ。お金なんていららないし、そういうのってバカな子がやることだって知ってるから。あ、本人たちの前ではこんなこと言ってませんよ。そんなこと言ったらわたし酷い目に遭わされるだろうから。あの子達ってすぐに被害者ぶるからわたし嫌い。売春してるくせに変な理屈こねてやってること正当化しようとするし、群れるし」

それが誠志の如何にも好みそうなセリフだと思っただけか、久美は自己否定でもするように同世代の彼女達を罵り続けている。誠志はズいぶん自分のことを軽く見積もってくれたものだ、と、健気に彼の気を惹く為友人を批判し続ける久美を、子供の浅知恵で大人を騙そうとしているつまらないやり方で、自分が彼女に気を許すと考えている久美がいかに自分のことを誤って認識しているのかが、ただ腹立たしくって、そんなにまで自分を慕っているくせに、その程度の理解しかしていなかったことが、自分の一番の教え子が、あるときそれほど自分の教えを理解していなかったことを知った際の失望に似た心地がして口惜しく、唇の裏側を悟られぬよう噛みしめ聴いて

いた。

その週は佐々木教授に誘われて切支丹館の記録撮影を行うことになつていたので、誠志も個人的な感情もあつて、思い出として切支丹館周りの写真を数枚撮るつもりでカメラを用意してきていた。

教授からそんな考えを聞くことになるのは、誠志としては意外なことだったが、もう市の決定を押し込め込むことが困難になっていることは誰もが疑わないところまで来ていたから、穏やかな教授の態度には、彼も同情せずにはいられず、中立の立場をとる自分を一旦忘れ教授の手伝いをすることに決めた。

教授の傍には同じ学校の井上先生もいた。国語の授業をすっぱかす彼女の為に誠志は何度か代理授業を行っていた。彼女は何かしらの反対運動に参加することが生きがいらしく、もっぱら市や県などといった公的機関を敵視するのが常だった。公務員でありながら、といった皮肉が誠志の口について出そうになることもよくあるが、彼女は校長に対し不思議と発言権を持っていたので、他の教師からは扱い難い人物として避けられることが多かった。

教授に指示された場所に撮影用の三脚を立てる。それを数回繰り返して、合間に教授と世間話をする。井上先生は無口で、二人の会話を窺う様子で聴いている。時々、警戒するように誠志が彼女の方を見ると、おもしろくない様子でこちらを、彼より先に見ている。

佐々木教授に一目おかれていた誠志を嫌つてか、彼女は彼に対し好意的ではなかった。自分達の活動に参加しようともせず、時々こうして佐々木教授と会っている誠志を、彼女はひどく優柔不断な人物のように考えていた。誠志も彼女の考えが分かっているの、同様に好意的な態度で話しかけるまでにはいたらず、黙々と教授の手伝いを続けていた。

作業に集中しようとするれば、久美のことが頭の中をかき回してくる。彼は久美を気にかけていることはもう認めていた。自分のこと

を不器用ながらも慕ってくれる彼女を好かないわけがない。教師としての立場はそれでも崩すことはないとも依然誓っていた。

人当たりの良さそうで、その実誰も心を寄せる者を持たない、家族間でも問題を抱える子供を救える自信はなかった。教師の職域を超えた活動にあたる難解な問題を解決出来るかと惚れるのは間違いで、自分の立場で可能なことと、不可能なことをはっきりと自覚できて初めて彼女への手助けというものが出来ることもある、と彼は考えていた。

自分は決して人並み以上の優れた教師ではない。まだ経験も浅い新米。だからこそ己の力量を見誤るおそれを意識しなければならぬ。はりきって申請け合いし、結局中途半端に終わるような教育では生徒達のためにならない。三年間で出来ることなどたかがしれているし、自分だけが教師ではない。だから的を絞って、せめてわずかながらの教訓めいたものを彼、彼女らの意識に留めておくことができれば、一応の教師としての役割は果たせたと思うことにした。教え子の心に残ることが教師としての勤めなのかと考え出すと、それはひどく身勝手なような気がしてくる。何も記憶に残らなくても、誰が言ったかは忘れたが、その言葉や行動だけは覚えていっているといたものでも充分に彼らの血肉となりえるのではないのか、と考え彼は教師として自分はまだまだ未熟でならないような気がしてきた。

井上先生が彼に近づいてきて、教授との距離を確かめながら、取り壊し反対の活動に署名すらしめないのはどういうつもりかと問い詰めてきた。その問いかけに素直に答えたら彼女との衝突を避けられないことは必死だったから、彼は極力彼女の活動を否定しないよう配慮した言葉で、ただ署名すると自分の教師としての立場が気にかかるのでと答えた。

井上先生は誠志を小心者で自分を持たない意志のないつまらない人間だという評価を下したようで、彼を見下した表情でそれ以上何も訊こうとはしなかった。

自分の考えを貫こうとすれば、彼女のような人物とも衝突することになる。かといって周囲との関係に目を背けることもできない。協調を重んじることは美德でもある。誠志は無理を通そうと苦しんでいる自分がいかに愚かな考えに落ちているのか理屈では理解しているだけに、感情はまるでついてこないことが残念でしようがなかった。ここ最近の季節代わりによる気温の変化についていけずに、彼はくしゃみを誘われた。もうそろそろ殉教祭の行われる時期になるうとしていた。

切支丹館前にある殉教公園は大勢の人ばかりで、取り壊しが決まった最後の年というのもあり、彼が見た中で、今回が一番の盛況ぶりだった。

小学校低学年の、男の子は白い布を肩に掛け、女の子は白衣姿に白いヴェールを花輪で飾ったものを被っている。おとなしくしてられないのか、時々走り出す子も見られた。

今年は珍しく松田も参加するというので、誠志は松田と連れ立ってやってきていた。

まだ日の暮れる前でも丘の上の寒さは厳しく、誠志もフリースのジャケットを、タンスの奥からあわてて引き出し着ていた。

「はよ始まらんかね。歩くか、中に入れてもらわんと寒くてたまらんわ」

「四時から始まるから、もうすぐだ」

松田はやっぱり帰ろうかと愚痴っていたが、子供の頃に何度もここを訪れた思い出を誠志に語り、その様子で、松田なりに切支丹館の取り壊されるのを寂しく想っていることが分かった。

「いざつてなると、なんかこみ上げてくるもんがあるなあ。子供の頃は退屈で遊び場にもならんかったから、どうでもいいと思っただけ」

館の入り口付近が騒がしくなってきた。そろそろ開始の時間が迫ってきていた。午前中祇園橋で行われた神道祭典には行けず、残念だったが、夜の行列の方が雰囲気は濃くあつて、彼はそこで切支丹館に最後の別れをしようと考えていた。

千人塚に人ばかりができていた。仏式法要が開始されていた。千人塚を取り囲むように人が集まり、千人塚の前に造られた壇上では、誠志の知らない文句を読み上げる少年の姿があり、その周りを囲む人だかりの口の動きが、少年の唇の動きを後追いするような輪唱の

声が公園内に反響し、不規則な音の揺れ動きに彼が酔っているうちに、隣にいたはずの松田が、いつの間にかどこかへ行ってしまっていた。それに気づいた後でも、彼は構わず神道法要が終わるまでそこから離れようとはしなかった。

信仰するものの違う人々が一堂に会し、互いの宗派を超え認めあう、この土地ならではの寛容さがなせる業が、余所者ながら誠志にも誇らしく、この土地の住民の人当たりのよさを実感していたから、ここでは宗教でのいざこざもないと言い切れるようだった。

一時間ほどして、今度はカトリックミサが同じ場所で行われる。それも見届けようと、その場を離れずにいた彼の背後から、久美が声をかけてきた。

軽く挨拶を済ませ、誠志は今日ぐらい久美から解放されたいというささやかな願いが、容易くかき消されてしまったことに失望を禁じ得なかった。

「先生、陣中旗を見に行きませんか？」
唐突に久美が誘ってきた。

彼が何も答えないうちから、もう切支丹館へ駆けて行く、久美の、弾むような歩みの後を不本意ながらも、誠志は追っていった。

陣中旗は殉教祭の間だけ本物が展示され、普段はレプリカが展示されていた。左右にアンジヨと云う羽根を付けた二人の天使が、アベマリアを唱え合掌する姿が描かれ、右側で祈る、天使の絵の上方にある赤黒いシミは、血痕だと伝えられていた。合唱する天使の中央には大聖杯、その上に聖餅が描かれてあり、陣中旗の上部にはポルトガル語で『いとも尊き聖体の秘蹟ほめ尊まえ給え』という意味の文字が書き添えられてあった。

誠志と久美は殉教祭の行われるなか、ふたりで本物の陣中旗を、ほかの観光客に混じり眺めていた。周りを気にしてか、おさえた声で久美が話しはじめた。

「この旗に皆がいつせいに付き従い命を落したんだから、不思議。わたしには、なんだかおたまじゃくしがしっぽ振って泳いでいるよ

うにみえる。ああ、違う、これは精子だ。子宮に向かっていく精子なんだ。そういうふうには見られない？」

くだらない。そう吐き捨て、誠志は自分の名前にかけてわざと久美がそんな戯言で、また自分の心を乱そうと企んでいるのだと勘ぐり、警戒心を強めた。

「わたしはまるで一つの子宮のようだと思いません？先生」

わたしに告白してくる男の子達は皆おたまじゃくし、いや、精子だった。あれが最も似ている。そして先生もわたしに群がる精子のひとつ。でも安心して。わたしは一億のそのの中から先生ただ一個だけを受け入れますから。卵子と結びつく前の精子は男女の区別もまだつかないのに、それが向かう先は必ず女なんですよ。男女が行き着く先はいつも女だということを、先生も、もう認めたらどうですか。自分の本心に、わたしを愛しているという事実には。

「稲生がどういう理屈でおれに構うのかはしらんが、たぶん、クラスの連中と賭けでもしとるのか、それでおれを口説き落とそうって企みなら、きかんぞ。稲生、お前こそいい加減にせえよ」

あはは、と久美は館内に無遠慮な笑い声を響かせ、誠志を馬鹿にした目で見つめ、

「先生は案外臆病者なんです。そんな俗っぽい理由でわたしが先生に近づいているなんて考えて、おかしい」

なら、お前の真意はなんだ、と誠志が声を荒げた。

何度も言ってるじゃない。久美はじれったそうに、ガラスケース越しの陣中旗を見つめたまま、「先生といると不快な気分にはさせられる」

「ならもう近づいてくれるな。お互いのために」

久美は答えないままだった。周りの興味本位な視線だけが、誠志に向けられていた。我慢できず、

「……灰の水曜日つてのは、復活祭の四十六日前のことをいうんだつてな。気になって調べたよ」

彼がやわらげた口調で、場の空気を変えようとしたが、彼女はそ

れにもならず、じつと陣中旗の生地にある、小さなシミを黙視するだけだった。彼はもう話すこともなく、久美をその場に残し歩き出した。

入り口のベンチでたむろしていた作業着の男二人の会話が、切支丹館を後にしようとしていた彼の足を止めた。

男達は、会話の内容からキリシタンではないことが判断できた。

一人が、市が特定の宗教に肩入れしていると不満を洩らした。

「神道と仏教がカトリックの引き立て役にもなつたらん」

確かに、切支丹館は前庭の聖杯をはじめ、どこもかしこも十字架だらけで、他宗教の入り込める余地はないほどキリスト教一色だったし、市が観光客を呼び込むために、キリスト教を特別に持ち上げていることも事実だった。役所と特定の宗教が結びつくことも危険なことだ、という男の言い分はもつともな気がする。そうなると、彼はさらに自分の立場が分からなくなってくる。

誠志は、これ以上中立の立場に居続けることから逃げてしまったくなり、あの国語の女教師みたく、佐々木教授達の会で思う存分、不満や不条理さを訴え、右と左に分かれ戦い合うのもいいかもしれないと、投げやりな心境に落ちていった。

六時前にはキャンドル行列の最後尾が切支丹館を後にしていた。人だかりも列を追うように丘を下りていってしまい、狭苦しく感じられた切支丹館前の庭も、本来の人気の少ない空間を取り戻していた。

館内から出て来た佐々木教授と出くわし、「沢口君のような熱心な若者にこれからの地方を支えてほしい」とまた頭を下げられるとさすがに今度は無言ではいけないと彼が、「ですが、わたしは余所者ですよ」

「あんたが、しょっちゅう切支丹館に来ることは、ここの係りの連中がよう見とる。最近は何曜礼拝にもいきよるって聞いとるけんね。若かもんでここまでしとるのは、ほかにおらん。あんたがその気ならわたしとここで働いてもらうてもよか」

さすが田舎は情報がよく通る。田舎のアナログなネットワークも捨てたものじゃない、と誠志は、まだ近隣の付き合いの濃く残るこの土地にも、再生の可能性がないわけではないという希望も捨て切れないでいた。

佐々木教授の背後に井上先生が立ち、白髪をニット帽で隠し、館内と公園の温度差に曇ったレンズの表面をそのまま、金ぶちの眼鏡の奥から、誠志だと分らないのか、瞼を細めて見極めようとしていた。彼の挨拶する声で気がついた様子で、お礼の言葉にどう答えようか考えていた誠志に、あなたは どうして佐々木さんを手助けしようとしなのか、と突き放す一声が投げつけられた。

国語の授業を自分に押しつけておいて、と腹が立つのを、教授の前だから、老齢の女教師が放つ一言、また一言に彼はじつと怒りをこらえ、一念に憑かれた人特有の、決して他の意見を受けつけない強固な精神に、信者、という言葉が悪い印象に塗り替えられていくのを、脳内で感じていた。

辛らつな井上先生の罵りを見かねた教授が、「せんせい。そがん
いっぺんに言わんでもよかでしょが。沢口君も彼なりの考えがある
とだけん」

教授の穏やかで、しつかりとした発音で、しわくぢやな唇をさら
にすばませ、井上先生はまだ納得がいかない様子だったが、教授に
は弱いらしく、それから、丘を下りながら談笑する教授と誠志を、
後から恨めしそうに、ついて来るだけになった。

中央銀天街のアーケードをくぐる前に二人と別れ、急いでキャン
ドル行列の最後尾を追いかけたが、もう行列は祇園橋を渡りきった
後で、これからカトリック教会に向かうところだった。

祇園橋の下には、遠ざかっていく燈籠の火がぼんやりと確かめら
れる程度に揺れていた。燈籠和紙の側面にはそれぞれの願いごとが
したためられてあるそうだが、そこからでは読みとれはしなかつた。
ぼんぼりの形をしたものがひとつ流れに負け沈みかけていて、激し
くゆらめき、和紙の内側から蠟燭の火がつき、いつそう勢いを増し
燃え出していた。

「なんや、今頃来たんか。どこ行つとたん。こん人込みじゃ面倒だ
けん、探すの止めて先行つとつたぞ」

松田が興奮した様子で近づき、声も一段上がって高調しているの
が、息づかいの荒さで判断できた。

橋に散らばっている花びらやこまかなゴミなどを、先程の、作業
着の男二人が掃除し始めていた。松田はまた彼の視界から消え、行
列の向かう先には、教授達が待ち構えていることを考えると、アー
ケードを引き返し、また井上先生の眼鏡越しの自説を延々と聴かさ
れるくらいなら、彼はここに留まり、寒さに耐えながら、祭りの後
片づけでも見ていたほうがましな気がしてきた。

橋を掃除している男二人がやけに活気づいているのが、殉教祭が
終わってしまう寂しさとはあまりにも正反対なので、誰もが皆同じ
意見ではないのがむしろ正常なような気がしてくる。好意的に殉教
祭を町興しの要にするため働く者もいれば、この男達のように内心

不信感を持ちつつ、狭い人間関係に妥協し、仕方なく参加する者があるのは、簡単に分かり合えない、両極に立つ者同士が、互いを尊重できない、人間の結末を見たようで、誠志は益々この土地で生きることの困難さが肌にしみるようだった。

山口川に沿った道路を二人連れの男女が、誠志の立っている反対側を、こちらに向かって歩いてくるのが、暗がりのなか視界に入ってきた。

久美が、同じクラスの男子を連れて歩いて来た。誠志の方には目をやらず、後を歩く新田にったに話しかけるでもなく、久美がたった一人で夜の通りを徘徊しているような雰囲気を受けた。

またか、と誠志は眉をしかめた。神経が小刻みに刺激されるのを確かめながら、彼も歩く前方だけを見て、久美とは逆の方向へ歩き出した。空き缶を蹴っ飛ばしたようなけたたましい音に、思わず振り返りそうになったが、寸前で、久美の底意が脳裏をかすめ、どうにかそれを押しとどめることができた。

誠志は、久美の悔しがる顔が目には浮かび、同時になぜ、久美が悔しがることに、勝ち誇った自分がいるのかということが、思考にはさまり取れなくなった。

冷静に、客観的に考えれば、高校生の女子に、同じクラスの男子が好意を寄せ、交際を始めたというのが自然な考え方で、どうして久美が、同じクラスの新田を好きではなく、自分の気を惹くための手段に利用しているなどと決めつけてしまったのかということに、彼自身不逞な感情を無意識のうちに抱いていたことが実感され、急に自分自身を殴りつけてやりたい衝動に駆られた。

歩くうちにうるおぼえの聖歌を小さく呟いている自分を見つけ、誠志はより一層力強く声を張り上げ、むきになり聖歌の文句をできるだけ思い出そうと意識した。

一年の国語を、井上先生に代わり見てやることになり、これで取り壊しが決定してからもう七度目の代理授業だった。さすがに生徒達の間からもうわさが流れ、そのことを訊かれる度、誠志は適当な言い訳を彼女の代わりにしていた。その日は自習ということにして職員室に戻ろうとした誠志に、野球部の丸坊主が、

「井上先生のせいで沢口先生も大変ね」

「井上先生にも考えがあるとだけん。お前らは気にせんでもよか教室からは反発の声が起こった。」

「先生、おれたちは先生より長くここにおるけん、よう親から話ばきくと。ここじゃ隠し事なんかできん」

「役所に入るにはコネがいるってことも、だれでんしつとるけん。しらんとは先生んごたる余所から来た人だけや」

野球部の言葉に追隨して、新田が発した言葉に誠志は私的な怒りを覚えた。役所のことを引き合いに出してきたことが、唐突であまりにも会話の内容とかけ離れていたのもあり、彼は新田を睨みつけ、もし新田が次の言葉を言おうものなら、殴りつけてやろうとさえ昂奮していた。そして、正面の生徒達全員を見据えるように、自分ではもう肩までこの土地に馴染んでいるのだと、皆に話して聞かせた。「三年目じゃ、おれもまだ余所もんか？」

「せんせい、おれは十六年住んどる」

生徒達の笑いに、誠志は苦笑するのが精一杯だった。そのやり取りの間、珍しく久美が彼と目を合わそうとしてこなかった。

久美が授業終りに、分からなかったところがあると質問にやってきた。その際、すばやく生徒名簿の間に薄い黄色の便箋を差し込んできた。教卓の壇上で起きた、ほんの一瞬の出来事に、生徒達の誰も気がついたふうな様子はなかった。新田ひとりを除いては。

新田は、気難しい、ませた頭脳を持った少年の、世間を自己の内

で結論を急ぐあまり、悩み抜くということを軽視する、いわゆる、あたまでつかちな生徒だった。決めつけがひどく、クラスでは親しい友人もないようだった。いつも教室の、自分の机だけを領域とし、休み時間になっても、そこから離れていこうとしない。周りの生徒も彼を気にかけてやるものもおらず、初めのうち誠志は、せめて自分だけでも打ち解けてあげようと、新田に、特別な親しみを持つて話しかけるよう努めていたが、それが気に入らないらしく、新田はよけいクラスから遠のくような拒絶の態度をとるようになってしまった。新田との膠着した関係が、久美の思惑により、なんらかの進展が見出せそうだったが、それが悪い結果になるという可能性が高いことも、彼には分かりすぎていた。新田は間違はなく、久美が彼に手紙らしきものを渡したところを目撃していた。はやとちりな新田が、発作的によからぬことを企みはしないか、誠志はまた別の不安が脳裏をかすめた。

職員室内において、周りを警戒しつつ、便箋を開け、手紙を読む。「先生。実は、わたしは教頭先生に頼まれて沢口先生を見張っていただけなんです。放課後下記の時間に視聴覚室まで来てください。証拠をお見せしますから」

具体的なことが書かれていなかったのも、誠志はどうしようか迷ったが、教頭に頼まれた、という文から久美がそれを知り得ていることが心にしこりを残した。また田舎の無差別に放流されるネットワークが働き、久美がその情報をつかみ、自分呼び出す口実に利用しようと思論んだ、と考えれば合点がいった。文面には書かれていなかったが、彼は久美がひとりで視聴覚室にいる姿を想像していた。

見張りなどしても何も得られないことは誠志自身がよくわきまえていた。佐々木教授の誘いにも、井上先生の叱咤にも自分の立場を境界線上に置くことを止めなかったのだから、久美の文面には嘘くささだけが滲み出ているようで、彼女が殉教祭以来おとなしくしていたのも、彼女自身これ以上誠志を追い詰める方法が尽き、ついに

こんな幼稚な行動にでたと考え、ではどうしてそこまで自分に固執するのか、久美の内心がさらに底深いものを感じられ、彼は真相を知りたいおもいから、彼女の誘いにのってやることにした。

放課後、久美の手紙に指示された通りの時間に、彼は視聴覚室へ向かった。もしこの手紙を利用して告白でもされようものなら、その場ではつきりと断わり、せめて痛手を最小限にとどめてやること、教師として自分が彼女にしてやれる精一杯だと信じて疑わなかった。

五時半を過ぎた、三階の視聴覚室まで辿り着くまでの間、ひとりの生徒とも出くわすこともなく、この時期、三年生は学校に居残って勉強するものはおらず、ほとんどの生徒達は塾で、受験テクニククの追い込みをしている頃だろう。それは教師の誠志にとつて寂しくもあつた。教え子達が志望する大学に合格してくれるのならば、塾で受験対策を十分すればいい。けれど、それを考えると教師としての自分は、受験の前ではまるで無力のような存在にさえ思える。いったい生徒達は合格を勝ち取った時の喜びを、自分と塾講師のどちらと本当に分かち合うつもりなのだろうか。沈み込む面持ちのまま、視聴覚室のドアを開けた。

教頭が、久美の体に覆いかぶさるように抱きついているのが、まさきに視線の先に入った。言葉もなく、こちらを見つめているだけの誠志を振り返り、教頭が久美から体を離れた。

久美はふたつ重ねた長机の上で仰向けのまま身動きもない。教頭が慌てふためき、誠志に事情を説明していたが、どの言葉も誠志の耳には入ってこなかった。机上に横たわったままの久美の、制服の乱れたところから露出した肌が、反対側の校舎からわずかに届く明かりに、ほとんど暗闇に近くなつた室内でも強調され、そこだけに誠志の意識を惹きつけ、捉え離さなかつた。

ふいに久美が身を起こし、まだ誤解だと言い張る教頭の背後から、彼を押しつけ誠志の目の前に歩みより立ち、いっさいの憎しみをぶ

つけるような形相で睨みつけ、誠志がその瞳の恐ろしい輝きに身をすくめ、弱々しく睨み返すのが精一杯なのに恥ずかしさを感じていると、彼女が思いがけない強さで、彼の両腕を縛るように抱きつき、むりやり、ほとんど叩きつけるようにして、激しく唇を押しつけてきた。

唇越しに歯がぶつかり、血の味が口の中に広がっていく痛みが先に来て、誠志はすぐにはそれを拒絶することができないでいた。

久美の腕力が思ったよりも強かったことで、よけいにむきになり、彼が手加減なく、彼女の両腕の拘束を解き、片手で顎をかちあげ、彼女のよろけた拍子に、両肩を握りつぶすくらいに爪をたて掴み、男の腕力の限りを尽くし突き飛ばした。

久美が長机とパイプ椅子を弾きながら床に倒れていった。遅れて金属のぶつかり合う、神経を削るような音がいつせいに押し寄せてきた。

久美のスカートがめくれ、膝から血が滲んでいるのが暗がりでもはっきりと覗けた。久美が上半身だけ起こし、首だけ誠志の方を向き、乱れた前髪が顔半分を隠し、その影から悲しみの眼差しで、彼だけを睨みつけ、腹の底に溜まったものの全てを吐き出すような金切り声を何度も上げ、人が集まってくるまで叫ぶのを止めようとはしなかった。久美の下唇が切れ、傷口が、張り叫ぶたびに広がっていった。血が制服のネクタイにまで垂れていた。叫び声に混じり赤い唾が飛び散った。

教頭はふるえているだけで、パイプ椅子を手すり代わりに立っているのがやつとのもので、口は動いていたが、声が喉のところを塞ぎ止められたように、吐息すらなかった。

誠志の唇がじんじんと痛み、口内に溢れてくる血の唾液を飲み込むごとに、鉄の味が知覚された。叫び声に呼ばれたらしい、複数の人の乱暴な足音が近づいてくるのが、久美の息注ぐちよつとの間だけ聴こえてきた。ドアが開いていたことで、誠志はそわそわだし、視聴覚室から逃げてしまおうかとさえ、その足音に脅えだした。が、

体が硬直しきって、両拳を握りしめ堪えるのがやっとだった。

視聴覚室での出来事はすぐに生徒達の耳にも伝わり、保護者から誠志を懲戒免職にするよう声があがり、説明会では保護者の、彼に対する様々な罵声が飛び交った。誠志は黙り込んだまま、何度も頭を下げるだけで、それが保護者達の怒りをよけい買うことになった。教頭が必死になって、日頃の彼の教師としての活躍ぶりがいかに熱心で一途なものかを熱弁してはいたが、結局保護者の納得を得られないまま、説明会は終了した。

職員室では、松田と教頭以外の教師からはしかと同然の扱いを受け、なかには、あからさまに誠志に聞こえる声で、なぜ、責任を取って学校を辞めないのか、その凶太い神経が信じられない、などと言い出す教師も出てきた。

教頭の頼みで、あの日誠志は教頭のしたことの責任を負うことになった。駆けつけてきた教師やまだ校内に残っていた生徒達は、三人をみてどうしたらいいか判断に迷うそぶり、しばらく状況を見極めようと彼らを一人一人観察し、誠志と久美の唇から血がでていることから、一旦は教頭が暴力を久美と誠志にふるったものと結論づけようとしたが、慌てた教頭の、誠志と久美との密会の場にたまたま居合わせ、そんなことは止めるよう説得していた、というせりふが、その場においては異様な力を持ち得たのは、皆が、誠志と久美がふたりでいるところを一度や二度ではなく見ていたからだ。た

教頭のぶさいくな言い訳に反論をしなかったのは、久美のことを考えてのものだったが、さすがに教頭が、誠志が久美を犯そうとしたところを救った英雄に祭り上げられると、なんだかくだらなくって、教頭の白髪や、こぶみたいに垂れた両頬、ゆるやかに膨らんだ下っ腹が一変しみすばらしく感じられ、子供相手にむきになり口げんかでもする時の、大人気なさに自省の念にかられるような恥ずかしさがあって、畳みかけるよう彼を悪者に仕立てようとする教頭の

嘘に、久美の弁明も得られず、誠志はそれで汚名を被ることを決意した。

必死になり弁解すれば真実を皆に分かってもらえる自信はあったけれど、それをやると久美が喜びそうな気がした。彼は久美の思い描く通りにはならないためだけに無言でいたようだった。

教頭はその件以来さらに、重成像を建てる活動を強め、熱心に保護者達に会への寄付を募っていた。誠志は、教頭の温情ということ、給料の減額と二週間の停職で済み、教職を退くことなくいられたが、生徒達は目に見えて彼を見下すようになり、授業もまともに受けるものもおらず、別の教科書を広げ、独自に勉強しだす生徒がいても、誠志は注意することも出来ず、ただ、黒板だけを相手に授業を行っていた。授業中、久美だけが彼の声を熱心に聴き、黒板に書かれた文字全てを楽しそうに書き写しているのが、彼には不愉快でならなかった。どちらにしろ久美を喜ばす結果しかなかったように、彼は自分の浅はかな自己犠牲の精神を疑りはじめた。それでも黒板に書く手を休めず授業を進めていった。

あの日、久美の叫び声を聞きつけた教師や生徒のなかに、いち早く新田の姿があったことを思い出した。新田が皆を連れてきたのだろうかとも疑ったが、真相を突き止めても何にもなりはしないから、そこで止めておいた。

その場で、駆けつけた教師に訊かれても、久美は何も答えたくないだけで、ひどい目に遭ったのだから当然だと、だれもそれ以上は、彼女から事件の真相を訊き出そうとはしなかった。

そうになると、自然と教師も保護者も生徒達も、教頭の話に頼るしかなかった。それに勢いを得た教頭のでたらめな英雄伝に、初めのうちは脳内で何度も反論をしていた誠志は、ふと、松田以外は教頭の言葉に誰も疑問を持っていないことを発見した。

誠志をかばうのは松田だけで、職員会議に集まった教師達のなかに、井上先生の姿を見つけ、一番に彼を糾弾してくるのを、興奮させる心地で、むしろ滑稽だと鼻で笑ってやりたくなった。

松田以外の教師達も同様で、教頭の言葉を一心に聞き入って、自ら考えることを止めてしまったかのような教師達の態度は、教祖の言葉に頼り、ありがたいお言葉みたいに全てを受け入れる信者達の姿を見ているようだった。その光景は吐き気がするほどで、誠志の傍観したような態度が気に喰わないと、ひとりの教師が、彼を怒鳴りつけるのも、そらぞらしく映って見えてしまうだけだった。

久美が誠志を毘にかけたことは疑いようのないことだった。しかし、策略というような上等なやり方ではなく、ほとんど無策で、どうしようもない稚拙な行動をしたにも関わらず、皆みごとに思惑通りの感情に変化させられていた。扇動というのは複雑な方法では駄目で、むしろ簡略化したやり方こそ、その威力の絶大さがあるようだ。と、あの時、教頭の熱のこもった話し振りに、飽きた様子も見せない教師や生徒達の態度は、自らの考えを裏づけしてくれるようで、誠志は冷笑まじりの皮肉のひとつでも、生徒達の前で披露してやりたくなる。

学校のなかでは、松田だけに真実を話していた。話を聞き終えるとすぐに松田は、疑いを晴らし教頭を退職させるべきだと息巻いたが、彼が久美のことを告げると、「実はな。あの稲生ってやつにな、うちのクラスのなかにひどい目に遭わされたっていう男子がおつて、そいつに訊いたら、稲生つてのはそうとう裏表の激しい性格らしいぞ」と言つて、久美の異常性を話しはじめた。

それは、以前に渡り廊下で見た光景そのままに、交際を申し込んだ男子を一喝し、彼女の外見に似つかわしい方言で、男子の容姿にまでふれ、ひどく罵られたというものだった。その内容自体には驚きはしなかったが、久美にしては不用意な行動がひっかかった。視聴覚室には、あずき色したカーテンが備えつけられてあり、あの時それが開けっ放しにされていたことを思い出し、それが久美の、彼女自身の未成熟なからだに掛けた保険のようで、そういつた細部にまでこだわる彼女が、彼が近くにいた時だけ行われる、彼だけを不愉快にさせる、彼の性質を知り尽くした絶妙な行動が、新田や他の

生徒を巻き込み出せば、自然と彼女の悪いうわさまでも広がり、結果、自分の首を絞めることになる事態を、あの久美が考えつかないわけがなかった。だとすれば、教室内で見せた楽しそうな笑顔は彼女の強がりだともとれる。そう彼の推測が確かなものとなるにつれ、久美もまた、彼と同様に追いつめられ、判断力を鈍らせていることが、しだいに理解されてくる。

そういつた彼女の思惑や心理状態が、輪郭を覗かせ窺い知れるようになる、彼はどうしても心底から彼女を憎む気にはなれず、むしろ哀れみの情が芽生えさえし、彼女の奇怪な言動は、悪意のない子どもじみた、愛情への渴望を浮き彫りにさせ、いじらしくもあり、そういつたものに隠された、あるよこしまな疑惑に、全神経が集約され導かれていった。

彼はその日、学校を去ることを決意し、松田にだけそれを打ち明けた。彼の、融通の利かない性格を知る松田は、考え直すように勧めたものの、内心では彼の心変わりを期待してはいなかった。二度説得をしたあと、松田は自嘲気味に、「おれみたいな奴にしか教師は務まらんけん、そのほうが沢口にはよいかもしれんな……」と苦笑いをしてみせた。

誠志の退職が生徒達のうわさにのぼり始めた頃、久美が学校に来なくなつた。稲生家に連絡をしても両親は例の親しみ易い口調で誠志にも対応をしてくれるので、当事者であるはずの両親が一番彼に優しくすることが信じられなかった。久美がいつか言った両親の愚痴が、それとは聴こえなくなり、もしかしたらあの時真実を告げていたような気がしてきた。

さらに数週が過ぎた後、久美が家出をしたと両親から連絡が来た。誠志の退職日を狙ったかのような久美の失踪にも、それほど神経を乱されることはなかった。あれほど肩肘張って守ろうとしてきた教職を捨てると気持ちがいかに穏やかになれることを彼は素直に受け入れ一時の休息を楽しもうと考えていた。

退職してからしばらくは引越し作業に忙しく、外出することも近所への買出しくらいの日々だったが、ようやくアパートを退出する目処も立ち、久しぶりに教会へ行ってみることにした。

それまでは、久美の両親に会うのを恐れて避けていたのが、引越しの日取りが決まった途端、まあ二度と会うこともないだろうからといった開放的な気分が誠志を教会へと向かわせた。

ここ最近は何所の目も、まるで彼を監視しているような強張った視線で、彼の外での行動も控え気味になっていた。

平日の教会は人の気配もなく、なんとなく教会の中へ入るのも躊躇われ、誠志は教会の周りをうろろろしている不審者みたいに、外から建物の中を覗き見ているしぐさが自分でも空しく感じられ、まだ着いてから10分も経っていないのに車に乗り込んでしまった。

彼の思い描いていた教会の雰囲気ではなかったことで懐かしむ気分にはなれなくて、すぐにそこを離れて行った。彼のちょっとした下心に反して、彼を氣遣う生徒はなく、ただ一人として彼のアパートを訪れ慰めの言葉をくれる者もいなかったことに落胆した自分に、彼は腹が立った。

無償の行為として教職についていたつもりの方が偽りに思えて、今までどれほど無理をして生きてきたのか、彼自身思い知らされた。結局自分はそうなりたいと願う唯の人でしかなかっただけで、教職者などには程遠い凡庸な人間だったということだ。それならいつそ久美の誘惑に乗り行くところまで行ってしまえば、結果は同じようになっただろうし、誤解を解くことをする必要もなくなり、偽善をする為にこんな葛藤を抱え去ることもならなかっただろう。

一昨日に会った新田のつまらない嫉妬からの中傷にも、同じように感情的なやり方で怒鳴りつけてやればよかった、と久美からの嘘まみれの手紙を受け取り、正義感を着飾った新田の正論まみれの抗

議に馬鹿正直な対応をとってしまったことも、まだ自分は教職に未練があることを物語っていた。

感情の表面的なところでは、もう決断を下したはずだったのに、ちよつとした他人の言動でこんなにもあっさり揺らいでしまうことが、彼にはまだ迷いのあることを自覚させた。

うまく偽善者にもなれず、かといってカツコ悪く開き直りも出来ない、自分はどこまでもどつちつかずな奴だった。本当は久美に惹かれていて、どこかで久美と立場を捨ててしまいたい気持ちを受け入れることが出来なかつたばかりに、彼女にいいように翻弄されていたことを誠志は理解できるようになれていた。

彼は堅苦しく物事を見すぎていたために、返って全体を見通すことが出来ず極端な思考に陥っていたそれまでの日々を省みて、何も久美を好きだという感情まで偽ることはなかつたことに思い至つた。

その感情を含め、教師として久美に接していればよかつただけなのだ。好きだからどうこうなるわけではない。行動を起こさなければ恋愛に発展していかなかつた学生時代を思い起こせば簡単な理屈だった。彼は、好きだということを知りてしまえば即久美と体の関係にまで進んでしまうという極端な理屈を勝手に作り上げ脅えていた。最近のそれらしい事件を見れば男の教師なら誰だつて少しくらい考えるだろうその手の関係。

それを認めたくなかつたのは、誠志が自分だけは特別な存在でありたかつたからで、そこに久美のような生徒の付け入る隙があつた。彼は純情という言葉が似合う精神の未だ未成熟な大人でしかなかつた。彼は聖職者という言葉に縋る心の弱い人間であつた。何かに縋りたいのは誠志も、久美も同じだつたからこそ二人の関係が奇跡的に、また歪に噛合い一時の奇妙な関係性が出来上がっていただけのことだつた。

そんな関係性に誠志が気づき始めた頃、ようやくその土地を去る実感と決意が、彼に久美との対峙する時を知らせた。

引継ぎに追われ、切支丹館が取り壊されるのに立ち会えず、夕方誠志が来た時はすでに館は崩れ、その後日、砂利も、石畳も掘り返され、今では小型のショベルカーだけが、でこぼこの地面に、斜めに立っているだけとなっていた。

取り壊された切支丹館は、もともと本渡城本丸跡を取り壊して切支丹館が建てられた場所だった。四十年ほど前にも同じような反発が住民から起こった歴史をまた繰り返すような、今回の切支丹館取り壊しは、遺跡を二重に蹂躪することになる、と反対派は最後まで抵抗し続けたが、活動空しい結果となつたいまでは人気もなく、展示品は歴史民族資料館内へ移され、そこはもう展望台の役目を果たすのみとなっていた。

椿の開花を楽しみにしていた誠志は、来年の開催時に、天主堂やこの土地を来訪しないことを決めていた。去っていく土地の将来を悩むのはよそうとも一応の、彼なりの結論をだしてもいた。

市民に報告もなく水面下で取り決められた改築事業は、もはや市の財政難を少しでも解消したいだけの思惑がありありと見て取れた。千八億円もの借金には、二十三億円の交付金では焼け石に水も同然に思われるが、アスファルトを無駄に掘り返し、人通りの少ない場所に道を築くことに比べれば、それなりに有用な方法だとも考えられ、それでも文化をないがしろにした政策など、土地に思い入れのない者のやり方だという考えも捨てきれない。そこに住む人々が市のためにあるような市政は、本来の目的を忘れ、手段が逸脱した行為でしかない。一部の人間の思惑のために文化や歴史、現在に生きる人達を犠牲にすることがあつてはならない。

そういつて、佐々木教授は今後も補助金交付決定の取り消しを国へ要望し、市へ補助金返還を求める活動を続けていくことを彼に告げた。彼はそれを他人事にしか聴くことができないでいた。

でも、この土地を去る彼を最後まで信じてくれた佐々木教授には、いくら感謝しても足りないほどだった。教授を裏切る結果となったことを、その時彼は心底詫びた。教授は、残念だと言いながらも、彼を引きとめようとはしなかった。彼も教授のそっけない態度がありがたかった。

この土地に居残ることが、誠志にとってどれだけの苦痛をもたらすことになるのかを、教授は知っていた。田舎の狭い土地では、彼はいつまでも蔑み者でしかいられない。一度身についてしまった悪名を払拭するのがいかに困難なことか、彼も教授もよくわきまえていた。

この間の大規模なデモがうそのように、丘の上は静かだった。展示品は別の場所に移され、寂しかった。寒さに身震いが時々起こる。新しく建てられた切支丹館はどのような造りになるのだろうか、それを考えると、寂しさは悲しみもまとい、さらに肌寒い心地にさせる。

先程から坂を上ってくる人影に気づいてはいたが、彼はそれが誰であるかを分かりすぎているだけに、意識的にその存在を認めようとはしなかった。私服の久美が手ぶらで歩いている。もうすぐ殉教公園に到達するところだった。軽快な歩き方から、心持ち嬉しそうに微笑んでいるようにも見えた。

教職から退かせたのだから、彼女にしてみれば喜ばしい限りだろう、と彼は久美の笑顔に辱めを受けているような敗北感を感じていた。

長い上り坂を苦もなく、むしろ急な坂を楽しむような軽い足どりで、まだこちらへは視線を送らず、それでも向かう先は彼のところだと、互いに承知しているかのように、誠志もそこを動かさず身構えていた。

殉教公園跡地の石段から、少しずつ久美の全身が姿を見せつつあった。最後の段に足をかけ、同学年の女子と比べ背の高い、彼女の華奢な全身が、誠志にお披露目でもするように、しばらくその場に

立ったまま、久美は近づこうとはしなかった。

肩にかかる程度だった髪が、襟足が風に舞うくらいには伸びていた。幼顔だったのが、眉から目元にかけ若干大人びてきたようにも見える。細い体が着実に丸みをおびた肉付きから、女らしさが漂ってくるようだった。

久美がうなじの辺りに両手をまわし、首にかけていたロザリオの紐を解き、誠志に手渡した。まだ久美の体温が感じられるそれを掌で確かめながら、久美の言葉を聴いていた。

「それを爪繰ってロザリオを唱えてください、ポケットにでも入れて、肌身はなさずに」

久美は、ロザリオを首にかけるのは本来のやり方ではないと彼に教えた。紐の部分が数珠状になっていて、銀色は錆で濁り、そうとうな年季の入った品だということが推測できた。

「家から持ち出してきたのか？ 大切なものじゃないのか？」

久美が穏やかな笑みで、いいえと首をふる。

「教頭先生が持っていたのを頂いただけ」

「それを何でおれに渡すんだ」

「聖職者になりたいんですよ？ だから」

手のなかのロザリオを、久美の腕をつかみ、強引に彼女の掌に握らせた。

「こんなもんいらん。お前のやることはいちいち意味が分からん」

久美はうつろな眼差しで、なくなってしまった公園の噴水があった場所に立ち、ここにマリア像があったんだ……、と呟き、地面に向け声に出さず祈りを捧げた。顔をあげ久美が彼に、これは教会にあったものを、わたしの指示で教頭に盗ませたものだ、と言っていた。あの青い目の外人は今頃きつと困っているでしょうね、とつけ加えた。

彼は怒る気にもなれず、いまだに理解できない彼女の行動を探ろうという気持ちも失せていたので、そうか、とだけ返した。

丘の頂上から千人塚を見下ろせるところまで歩き、てっぺんにある十字架を視線においたまま、彼にも十字架を見るように手招きした。

じゅんきやうせんせんにんづか

殉教戦千人塚の周りを囲むようにして、ジャノメエリカの桃色花が咲き始めていた。誠志が久美のとなりに来ると、千人塚にわざわざそんな花を植えたのは、わたしののような意地の悪い女に違いないと独り言のように呟いた。彼が同じように塚を眺め、「そうとも言い切れないだろう」

久美がうなだれ、いいえ、そういうのは女にしかできないことです、きつと女の仕業です、と頑なに主張した。彼女は一度だけ誠志の横顔を、彼が気づかないほど素早く盗み見て、耳元へため息をつくような、けだるく重い口調でしゃべりだした。

「扇動つて、それを実現させようとやっきになっているときはいいけど、いざそうなってしまつとつまらないものね。わたしは先生を愛してるっていつてきたけど、それは全部嘘。わたしに従う人たちは大勢いるから。バカみたいにみんなわたしを信用してくれる……、クラスの子達、近所の大人達……、だからわたしには反対勢力の存在が必要だつたんです。そんな時、先生の青臭い教師像を語る姿にわたしは生涯の宿敵を見つけたときのような、複雑な悦びを初めて感じられたんです。毎日が楽しかった。先生の嫌がりそうなことを考えるために、先生の表情や、話す言葉の裏を観察したりして……、充実してました。わたしはいろんなやり方を模索し、それを行動に移し、先生を責め抜いた。くだらないものから、ちよつと激情的なものまで、いまおもうと恥ずかしいくらいのやつ……、新田を使つたのはあきらかに失策だつたけど、それらを先生はわたしの仕業だと承知の上で、懸命に堪えてこられた。先生は、先生の目指す目標のひとになれたんですよ。わたしの与えた苦行に耐えることで、い

まの先生は、このロザリオを頂けるくらい立派な聖職者になったんですよ」

頬を叩いた。丘の頂上にこだまする反響が、誠志の脳内に跳ねかえり唸っていた。感情の赴くままに、久美を、一切の加減もせずに、彼は右腕を振りぬいていた。教頭が、職員会議で見せた虚偽の擁護の言葉や、同じ職場で働く教師達の黙秘のいじめにも、生徒達の冷淡な眼差しにもなかった、圧倒的な屈辱感が、彼の体を振るわせた。いままでにない感情が全身を占め、久美のうずくまり、はたかれた頬を強く押さえ、必死で痛みに堪えている姿にも哀れみさえなく、全身を覆う屈辱の怒りは衰えることはなく、その炎はさらに勢いを増していくようだった。

「お前のはそんな大層なもんじゃない。子供のいたずらだ。俺を陥れたって？ そうじゃない。お前に同情したから黙ってたただけだ。でももう情けはかけんぞ」

もう公園とは呼べなくなった、掘り返された地面の、沈み込むような感触のなかを進み、石段を踏みつけるようにして下りていく彼の背中に久美が、自分は六歳の頃、教会に勤める、青く冷めた目の外国人の神父に、服を脱がされ体中を撫で回されたことがある、と悲鳴のような叫びで訴えてきた。仕返しをしたまでだ、と。両親に話しても信じてもらえなかった、だから復讐してやろうと、その日決意した。

「わたしは不幸なんです」

誠志は振り返り、静かに息を吐いた。

「それが本当のことだとしても、遅すぎる。ひどい仕打ちだな。でも、それだけしか思わん。ほかには何もなか……」

「……」

誠志が久美に背を向け再び歩き出すと脅える声で、
「教頭がなんで重成像に拘るか知ってますか、あいつは建設会社と繋がりが」

「続けようとする彼女の言葉を遮って彼が言った。
「市が建設会社に前金で一千万円支払つとることか？ それならも

う地裁に住民監査請求書が出されとる、おまえが背伸びなんかせんで子供らしゅうしとけば、助けてもやれたのに……」

先生を助けようと思つて、わたしだけで教頭を陥れることもできるのに、まだ教師に戻れるのに、と久美がひざをついた姿勢で、服に付いた泥を払おうともせず、切々と嘆くのに、彼は非情な返答を叩きつけた。

「おまえはおれの邪魔しかしとらん。現に退職したんだつて、おまえのせいじゃなかか」

誠志の本心に、ふたりが別々の感情を、同時に抱いた。彼は、自分の意思の底にある、利己的なものに突き当たり、偽りの自己犠牲を確認した。

彼女は、彼の言葉に精神的な拒絶と、突き放された絶望感に、複雑な涙を滲ませた。

久美が、涙で濡れた顔に薄笑いを浮かべ、「……そうだった、あんたも先生じゃなかったわ、……じゃあ、はやく消えろ……」と口がうまく動かせないらしく、躓きながら、口調に勢いもなく、ほとんど口籠るような、か細い声だったので、彼は全部を聴きとれなかったが、もう先生ではない、という言葉だけが際立つて記憶に残り、長い間後をひいた。

それでも、切支丹館跡地から遠ざかる距離に平行し、久美のとぎれとぎれの、寂しく卑屈に泣き笑う声はしだいに薄れ、坂を下る彼自身の硬い足音にもかき消され、自らに対する憤りだけが、心のうちにくすぶり、いつまでも鈍く疼いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6861g/>

殉教祭の聲音

2011年9月11日03時23分発行